黒羽芭蕉の館だより㉕

黒羽芭蕉の館コレクション展「黒羽周辺地域のやきもの ―志鳥焼―」

県内では、江戸時代から明治時代にかけての窯(跡)が二十数カ所確認されています。黒羽には、文化年間(1804～18)頃に岡の台瀬戸焼があり、明治39年(1906)から大正14年(1925)にかけて、かなめ焼が焼成されていました。

黒羽周辺地域にも窯跡が散在し、その内の志鳥焼(現那須烏山市志鳥)は、幕末期頃から明治時代にかけて、那須郡志鳥村の鈴木家・大宮家・水上家の3カ所で焼いていた民窯です。その中で最も古いと言われる鈴木窯は、越中国砺波郡井波町(現富山県南砺市)出身の斉藤栄三郎が、志鳥村名主鈴木忠兵衛のもとで嘉永7年(1854)以前に開窯し、明治20年(1887)頃まで続きました。製品は甕・皿・徳利・擂鉢・壺などで、地元や喜連川方面に販売されました。

大宮窯と水上窯は、それぞれ大宮久三郎(越中国砺波郡出身)、水上年蔵(大宮久三郎の娘を娶る)を創業者として、明治末期まで続きました。製品は日用雑器です。

当館では平成22年度、広瀬久之進氏(やきもの研究家)より志鳥焼の伝世品を多数寄贈され、平成23年度には山口君子氏より大宮窯の陶片を寄贈されました。本年度の当館コレクション展は、これら志鳥焼の数々を鑑賞していただくことを目的として、次のとおり開催します。

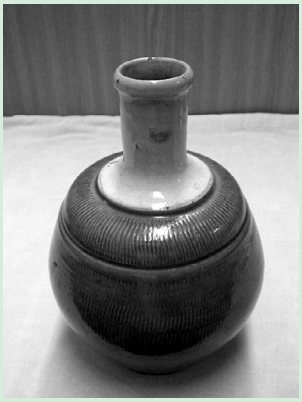
●テーマ
「黒羽周辺のやきもの―志鳥焼―」

●会　期
3月20日(水・祝)～31日(日)

●会　場
黒羽芭蕉の館　研修室

●展示資料
飛鉋文白首徳利、柿釉黒流し甕など約30点

●観覧料
大人300円(200円)
小中学生100円(50円)
※(　)内は20名以上団体料金


飛鉋文白首徳利

■問い合わせ
黒羽芭蕉の館
TEL(54)4151

彫刻周遊㊷

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介します。

この作品は浅香3丁目交差点の北西の角に設置してあります。

この作品は柱状の白御影石と平べったい黒御影石がセットになった作品です。

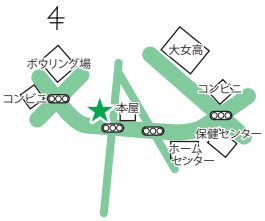
白御影石の方は、中心に1筋の線が入っており、その線から、左右の石が前後にずれているように削り出されています。向かって左側の石は細かな凹凸をつけてやわらかい印象に、右側は粗めに磨いたあとに何本もの線を入れて鋭い印象に仕上げています。また、右側の線は、作品の前後と上は水平に彫っており、側面は、それらの線を2本ずらす様に斜めに線を入れています。

ネナード・ソスキッチ 氏

作者は石を選ぶ際、石が持つ性質を最大限に引き出すことを意識するそうです。そうして選んだ石と向き合い、性質に自分のコンセプトを乗せることで作品を制作します。制作中の一彫り一彫りは完璧でなくてはならず、完成した作品は完璧な彫り、「ゴールデンカット」と名付けられました。

作者はユーゴスラヴィア(現セルビア・モンテネグロ)生まれのネナード・ソスキッチ氏。当時は地元のセルビアとモンテネグロを中心に、国際的なシンポジウム、ビエンナーレ、トリエンナーレなどに参加していました。

設置場所案内図(★印)



Golden Cut(ゴールデンカット)
ネナード　ソスキッチ
セルビア・モンテネグロ　2004年

■問い合わせ
文化振興課文化振興係　TEL(23)8718